

勇者一人旅 ～Hero
and Guts～

ライコーダイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺はスライムに敗北した。

これは失うことから始まる物語。

本来の正史から少しだけ離れたたった一人の勇者の冒険。

仲間はいない（定職持ちだから）、娘はいない（仲間に誘わないから）、レベルもない（下げられてるから）

レベル1の勇者の物語（シグレイ風）

レベル1の勇者ラルフが魔王を倒すまでの敗北とリトライの英雄譚？である。

目次

スライムにずたぼろになっていた頃の日記	1
スライムをなんとか倒せるようになった頃の日記	6
森の守護神を倒した頃の日記	14
地のダンジョンで七転八倒していた頃の日記	21

スライムにずたぼろになっていた頃の日記

【二回目の日記】

スライムに負けました。

【二回目の日記】

俺の名前はラルフ、勇者だ。

これを読んでくれた誰かに分かるように記しておく。

といつても他人が呼んだ頃には俺は死んでいるだろうが、いや、死なないけど。

今回から日記を付けることにした、自分の敗北した理由をきちんと解析するためだ。

ちなみに今回の俺だが、ラットに袋叩きに合って負けた。

まさか一匹すら切り捨てられないとは、数は力って奴か。次回から少ない奴を狙って
いこうと思う。

ろくに金もないが、ハウスとかいう変人に家を貰ったおかげで宿代には困らない。ダ

ンジョンでアイテムなり、金を稼がないと。

あとなんか自警団とか、ダンジョン護衛の仮面つけた女性に声をかけられた。もしかして勇者ラルフさん？　といわれたが違いますとっておいた。

ただの冒険者のラルクです、ちよつと無茶をする年頃なんです。

いやだってラットにリンチにされて勇者なんて言えないだろ、マジで、マジで。

今日は寝る。

【三回目の日記】

今回はゴールドスライムに雷でぶつ飛ばされた。

まさか経験値のカモだった奴に負けるとは、これがミイラ取りがミイラになるって奴か。

ザツクの出してくれたカレーライスという料理を食べながら反省する。

高い奴を狙うのは駄目だ、まずはスライム一匹、これを倒す。

泣けてきた、どうして俺がこんな目に。あ、別にカレーライスが辛いわけじゃないぞ！

【四回目の日記】

モンスターを避けながら、ひたすらにアイテムを回収することに専念した。
レベルは1になっても、戦闘以外での身のこなしは変わらない。

集中さえ切らさなければ昔三十回はもぐった大魔王の城での警備網でもなければ遭遇すらもない。

といつても戦闘になったら今の足だと逃げ切れないから戦うしかないんだが。
そうやって切れ味のいい剣を入手した。

愛用していた勇者の剣は折れないだけで、ぶつちやけ強くなり過ぎたから使ってたクソ弱い剣だったんだがもう使ってられん。

敗北すると知って準備を怠るのは勇気ではなく、蛮勇なのだ。

とおもってたら、なんか変なキャンディを配っている（子供への誘拐犯だろうか）女にぶつ飛ばされた。

大人には私を倒さないとくれないぞとかいって、なんだあの強さは。

ボロクズにされながらも町の前まで運んでくれたらしいので、悪い奴ではなさそうだが、うん。

日記を書き終わったら、朝まで素振りをすることにする。

【五回目の日記】

森の守護者にぶっ飛ばされた。

ベヒモスという魔獣だったのだが、俺がレベル1だと知るとお前みたいな弱い奴は勇者じゃないだろといわれた。

勇者の資格は強さじゃないぞ！ 勇気だ！

と主張したのだがまあ無理だった、スライムなんぞより百倍強い奴にスライムすら倒せない俺が勝てるわけもなかった。

どうするかな、初心に戻ってまず弱点から探すか。

レベルを下げられると同時に覚えていた勇者専用魔法も五十は覚えていた魔法もなにもかも消去されていた。

昔の仲間だった魔術師曰く「レベルを下げられる毒というよりも複合呪詛に近いぞ、なにやった？」

といわれたが、俺が聞きたいわ。

ぶーたれたのは自覚してるが、魔王は倒すつもりだったんだぞ。王様の奴、魔王倒させる気あるの？

700回ぐらい魔王倒した間のは殆ど作業だったから覚えてないが、初回の時は仲間

も五人ぐらいいて、倒すのに数年かかって世界中被害やばかったつうのに。

あ、思い出したらあの兵士ですに怒りががが。

レベル上げたらあいつの顔凹ませる。忘れないように太線で記入した。

筋トレしつつ腕立て伏せ出来る回数が五回ほど上がった、薪も三回ぐらい切り付ければ割れるようになった。

明日はスライム倒せるか、な？

スライムをなんとか倒せるようになった頃の日記

【六回目の日記】

スライム倒したどおおおおおおおおおお!!

まあそのあとすぐに四匹のスライムにリンチにされたがな!!

だが、三回ほど切り付けられればなんとか倒せるようになった!!

これはレベルが上がる希望が見えてきた! 今なら鼠もタイマンでなら倒せるはず。

次回から一匹ずつ闇討ちしてははは、レベル上げのカモにしてやるぜえ!

とはいえ森の守護者を倒す算段がまだ立たないんだが。

日記を書き終えたらまた魔術書を読みながら練習をすることにする、火か氷か、多分どつちかが効くと思うんだが。

今の俺のMPは下級呪文一発か二発で終わる、通じる奴だけ調べて、何度かトライだな。

【七回目の日記】

ライバルと遭遇した。

名前はオクオック、なんの捻りもないがオークの獣人だった。

なんでも伝説の魔物になるのが目標らしく、俺がスライムを倒していると挑んできた。

で、強さだったがぶつちやけクソ弱かった。

なんせ今の俺と死闘を繰り広げるレベルで、へつぴり腰の剣は打ち合えばお互い手元が痺れるわ、見習い魔法使いレベルの魔法は同じぐらいの威力だわ。

松明レベルのファイアとファイアが激突して、相殺した時にはお互い目を瞬かせたレベルである。

だがあいつの気迫は本物だった。

辛うじて俺が今回は勝利を収めたが、あいつは強くなるだろうと俺は確信している。レベルも上がるらしいし。

最強の魔物とやらが目標らしいが人に迷惑をかけず、強くなるだけなら構わない頑張ってくれ。レベルも上がるらしいし。

ただし魔王にはならないでくれよと真面目にいったら、魔王よりそれを倒せる勇者よ

り強くなるのが目標だからといわれて俺はちよつと泣いた。

俺は頑張るよ、レベルはまだ上がらないが。

さて後何体倒せばレベルが上がるのか、テンションのままベヒモスにもう一回挑んで蹴散らされた夜に日記を書きながら思った。

【八回目の日記】

レベルあがらねええんだどおとおおとおおとおおとおお!!

おかしい、どう考えてもおかしい。もうスライム十体、ついでに気合と根性でゴール
デンスライムを滅多打ちにして倒したんだが、レベルが上がる感覚がない。

昔はレベル1からあいつ一匹、同族の奴を倒したら五レベルは軽く上がったはずだ。
ラットも十数体なんとか倒してる、なのにレベル上がってないぞ。

森の守護者のところまで困惑しながらなんとか侵入して挑んで、ぶっ飛ばされた。

ベヒモスの呆れた顔に慣れつつも、火に弱いことは確認した。魔力を上げれば有効打
になりそうだ。

森の守護者は試すだけだから死にかけたら外まで転移されるので慣れた作業になり

つつある。つらい。

森の外まで放り出され、通りかかった自警団さんに「大丈夫？　ついていってあげようか？」といわれるが大丈夫ですと言うしかなかつた。

明日はここに来るまで乗っていた船で一端城まで戻ろう、どう考えてもおかし過ぎる。

そういえば拠点にしている街なんだが、妙に女の子が増えていた。移住してきたんだろうか？

変な恰好ばかりだったが。

【城へのアタック一回目の日記】

殺す。

絶対に殺す。

城まで戻って報告と確認にいったらあのくそむかつく態度の兵士に追い返された。

なあにが「スライム倒してレベルがあがらないいゝ？　それって勇者様がレベル高

過ぎるだけじゃないですかねえ？」

だ!! ふぎけん!!

殴りかかったら片手で返り討ちにあった。

口論しようにも相手が暴力を出してきてはレベル1の俺には勝ち目がまるでない。

あいつが魔王倒しに行けよと思う強さだったが、うん、まあ魔王を倒すのは俺の仕事だし、はあ。

ていうかあいつ最初、スライムでも倒してレベル上げるとか言ってたよな。把握してないわけ、ない、よな？

少し間を置いてもう一回いこう、幾ら人のレベルをぶん下げている王だが、お世話になったような、なつてないような、王様だが、うん。

考えるのはやめよう、今日は日記はここまで。張れた頬に氷囊当てながら寝る。

【九回目の日記】

オクオックに敗れた。

どうやら俺が城に戻ってる間修行をしていたらしく、剣はそこそこだったが、魔法の威力が段違いだった。

下級上位魔法まで覚えてやがる。

一発で黒焦げにされて、予想以上のダメージに死ぬかと思つたが、回復してもらつた。俺を殺さないのか？ と尋ねると。

「ラルフはレベルは上がつてないが強くなつてた、まだまだ俺も弱い、一緒に頑張ろう」とスマイルでいつてた。

俺はその言葉に差し出された手を握つて、次回のリベンジを約束した。

今日は帰つて素振り、そして魔法の修行をしよう。魔法防御も上げなければいけない。

あいつに胸を張れるライバルになろうと覚悟を誓つた。

もう自分で飯を作つてる暇もないな、ザツクのところですつと食つてるが。

【十回目の日記】

手に入れた服や腕輪、それに切れ味のいい剣を手にしたお陰か三体ぐらいのスライム

なら半殺しレベルで倒せるようになった。

賞金首と呼ばれる極悪モンスターもたまに見かけるが、まだ手が出せない。

じつと動きを見つつ、対策を練っておく。いずれ倒さなければいけないからだ。

勇者時代は魔王以外にも粗方の賞金首をぶつ飛ばしていた。

賞金首モンスターは人間がダンジョンに住み着いて脅威になったり、経験を積んで知

恵を身に付けたり、あるいは特異な変異を起こした連中だ。

放置すると被害が出るのは間違いなく、野良の冒険者の多くは専用の賞金稼ぎでもなければ避けるため長生きをする。

なのでこうやってダンジョンに積極的に潜る俺が倒すべきだろう。

とおもったらなんか変な少女集団がダンジョンで見かけた、危ないと思って声を掛けようと思ったらお腹向きだしの十代半ばぐらいの女の子が蹴りで俺だと手が出せないモンスターを蹴り飛ばしていた。強かった、くまさんパンツだった。

他にもなんか囚人服を着ていたり、目元に包帯まきつけていたり、個性的な連中だった。

最近の女の子ってしゅごい、俺は勇者として始めて知った。

なんかあまり喋ってない隅っこの子がこちらに視線を向けていたような気がするが気のせいだろう。俺声かけてなかったし。

あとベヒモスに負けた。魔法を二発叩き込み、怯んだところで剣で斬りつけて、アイテムなどを駆使しながらやりあっていたが惜しくも負けた。

「こいつ、強くなっておる」

と言われた気がするが。まだレベル上がってないんだけどな。

そういえばこのダンジョン推奨レベル5ってギルドで聞いたが、どっかに推奨レベル1のダンジョンはないものだろうか。

今日はランニングと素振り、あとザツクの奴に言われて畑の手入れをする。

筋力は上がっている気がする、うん。

森の守護神を倒した頃の日記

【十一回目の日記】

オクオックに再び敗北した。

ダンジョンで再会し、さつそく剣と斧で切りあうこと数合。魔法一発でぶっ飛ばされた。

物理攻撃だけならまだ覚悟決めて食いしばれるが、魔法はきつい。

完全に防御姿勢に入れば跳ね返すことは出来るが、それだと斧で殴られる。

どうにか一発喰らっても耐えられるだけの魔法防御力がないと勝負にならない。

じ、次回こそリベンジをすると誓ってザックのところまで健康にいいというオニオンスープを食べてから寝ることにする。

MPも足りないし、久々に瞑想でもするか。

【十二回目の日記】

はい、通り魔に襲われました！

その名はキャンディペロン、一度俺をぶっ飛ばした少女である。

なんとか素振りの成果キントレのおかげか、それとも使い慣れてきた切れ味のいい剣のおかげか、スライムも二発で切り倒せるようになった！

鼠は一撃で切り倒し、プラントは怖いのでファイアをぶち込んで焼いて倒す。

毒スライムが混じったスライムの群も範囲を薙ぎ払えるフレイムのおかげで半殺しにされる程度で勝つことが出来るようになったのは大きな進歩だった。

モンスター相手に怪我を負いながら倒して進んでいたところに後ろからバックアタックだった。

声をかけられる↓ちいーすまたあつたね、キャンディ欲しいならあたしを倒しな↓ど
ういうことだ!?

だがこの勇者ラルフ、挑まれた勝負からは逃げも隠れもせんぞ。

という感じで戦ったのだが、負けた。

ていうかあいつ自分で飴を舐めれば怪我は治るわ、斬りあっている間に眠くなる飴を詰め込まれ、意識が戻ったと思つたら吹雪に晒されて、手足が凍り付いていたところを
タコ殴りにされた。

あいつはキャンディーじゃないアイスキャンディー屋だ、間違いない。

ガチガチに凍っていたところを街の前で放置されていたところを、どこかで見覚えのある少女と自警団マスクレディに通りかかられた。

炎の魔法剣が使えたらしく解凍してもらったのだが、その解けた雫と一緒に涙が出たのは内緒である。

しかしあの子、俺の顔を知っていたのだろうか。

自警団のマスクレディが「ラルク」といつか名乗った偽名で呼ばれてた間、何故か首を捻ってこちらを見ていた。

知らない顔なんだけどなあ、あのユメルって子。

【十三回目の日記】

ベヒモスへの五度目の挑戦。

オクオックスとも遭遇せず、キャンディ通り魔に襲われることもなく、モンスターを慎重に倒しながら森のダンジョン最深奥へと到達した。

前回倒されかけたのを忘れてないのか、舐めた態度でもなく、最初に出遭った時のような重々しい口調で何故挑むのか聞かれた。

それに俺は勇者ってのは何度でも諦めないものだと言っただけ言って、戦闘に入ったと思う。

戦いは多分過去にないぐらいクソ長い闘いになった。

最初の一発目で魔力全部使いこんだファイアの上位魔法をぶちこんで、後はひたすら剣で斬り合っていた。

あいつの蹄の一撃はこっちの防御の上からでも効くし、体当たりなんて喰らった時には足元を崩して転ぶわ、頻繁に威嚇のように上げられる咆哮にガード用のアクセサリをつけてなかったら何度手と一緒に心臓が止まったことやら。

だがアイテムを湯水のように使ったお陰か、途中から何度かお前本当にレベル1か？とか人間とか言われたが、最後に立っていたのは俺だった。

つまり勝った。

大事なことなのでもう一度記入するが、勝ったのだ。

魔王の城へと侵入する為の森の宝石を譲り受け、俺は始めて無事な姿で町へと戻るこ
とが出来た。

ちなみにベヒモス曰く他の守護者たちも同じように試練をしてくるらしい。

力を示し、真剣勝負で勝たなければまず封印を破るための宝石は渡してくれないと
か。

あとだってお前レベル1だから渡すのすっごい躊躇うじゃん？とかいうのはいら
ない言葉だった。

とはいえ、まだマグレに近い勝利だったから力試しとか修行にはまた来いと言われた。

もう一回勝てる気があまりしないんだが、うん。
頑張るぞー。

【ダンジョンに挑んでない時の日記】

今日はダンジョンに挑まずゆつくりした。

さすがに短期間で十二回もぶつとばされたせいか、気が抜けると夕方近くまで寝ていた。

今からダンジョンに挑むと中で夜を過ごすことになるので街で一夜を明かすことにした。

ザツクのところで飯を食った後、町の中をぶらぶらしていたのだが本当になんか住人が増えていた。

そのうちダンジョンで出遭った女の子もいたが、それ以外にも知らない子が増えていた。

変な短い上下の服の本人曰くセーラー服というララに、黒いマントにフードで包帯で

顔を隠したデイエという子と知り合った。

なんでも女子高生とやらというララ、レベルは300超えてた。うん、もう一回言うが300超えてた。

正確には382とかいわれた、俺の382倍だった。

おかしいということだ、弱めの魔王とだったらタイマンで倒せるレベルじゃねえか。ララの出身地だったら同じ女子高生だったらこれぐらい普通だよ？　といわれたが、え、なに魔界かなのかその出身地。

あとデイエという子にはなんか呪いを掛けられた、が。

「なんであなたこんな特上の呪いかけられてるの？」

といわれた。失敬な、ただ毒を盛られただけだ！

手足が震えて、HPが1となり、運が下がって石に転んだりとか、そういう感じの呪いでんこ盛りで酷い目にあつたが、まあ追いかけてこは楽しかった？

モンスターも出ない野原で火を起こし、炙ったチーズを三人で食いながら色々話を聞いた。

どうやら他にも同じような子がいるらしく、この間知り合ったユメルも彼女たちの仲間らしい。

なんでもエロイサマナーとやらに召喚されてここにきたらしいが、エロイサマナーっ

てのはなんなのだ。いきなり尻触られたとララが怒っていたのがとんだエロサマナーである。

一応本人の意思と、観光のような感じで来たらしいので召喚された女の子たちも楽しんでるらしいので平気らしいが。

この大陸変わった連中も多いな、まあ昔の俺の仲間も何故か大量にいるからお互い様だが。

あと勇者ラルフって人が魔王退治に挑んでるらしいけど見たことある？ つていわれたが、シラナイヨって言っておきました。

言えない、女子高生に指一本で負けそうな勇者なんて言えない。知り合いにも口封じしておかなくては。

今日は日課の筋トレも休んで寝よう、明日は土のダンジョンだ。
さてどんなのが待ち構えているか、強いんだろうなあ。

地のダンジョンで七転八倒していた頃の日記

【十四回目の日記】

レベル1でなんとか森のダンジョンをクリアした。

いやあまだまだ勇者の素養は健在ってことだな、これなら地のダンジョンも楽勝だぜ。

そう考えていた時期が今日の朝までありました。

ダンジョンでコカトリスとオークとバットにリンチにされて負けました。

今はずたぼろの体をなんとか家まで引き摺って、ストーンを喰らった腰に氷嚢を当てながら書いている。

いやまじでなんとかかなりそうだったんだ。

砂漠に位置する地のダンジョンだが、出てくるのは血を吸う吸血蝙蝠のバットに、蛇と巨大鶏が合成されたような恰好のコカトリス、あとオーク。

未だにレベルは上がらないが、森の守護神であったベヒモスと比べればオーク二体ぐ

らいなら多少手傷を負うぐらいで倒せたのだ。

ていうかオクオックとは比べ物にならないぐらい弱くて、オークといってもちよろいななどと思っていました。

だが数の暴力は舐めたらいけなかった、混成の集団とぶつかったところ、顔面にバツトがぶつかり、四方からオークに殴られ、斬り払おうとしたらコカトリスのストーンが連打で頭と腰に直撃した。痛かった。

魔法はやめおお、回避もできねえんだからよ！

傷が癒えたらもう一回チャレンジして、アイテムを回収していこう。

森のダンジョンよりもいい装備が落ちてそうだ、魔法対策もしねえと。

【十五回目の日記】

オクオックだいいいいいいいん！！

にやられたのは俺である。

どうやらあいつの修行場も場所を変えていたらしく、地のダンジョンでオークをずんばらりしていたら遭遇した。

今回も挨拶から斬り合いと戦いになったが、なんとか一発フレイムIIに耐えたが、連射されて負けた。

しつかりと魔法戦士の道に進んでいるらしく、回復した後、お前同族たくさんいるがここで修行していいのか？ と尋ねたが「俺ははぐれものだったからな、嫌われてるからええんだ」とのこと。

どうやら森のダンジョンに一人いたのはそういう理由だったらしい。

強くなった腕で同族を見返してやろうとしていたらしい。

頑張つて欲しいもんだ、そして俺のレベルは何時上がるのか。

三度目の正直はもう通り越してしまったのだが。

あとひよこひよこ黒焦げて帰ってきたら、ダンジョンパトロールのマスクレディ（レフィという名前だったらしい）に声をかけられた。

いつもとは違う方角から帰ってきたのでどうやら森のダンジョンを卒業してくれたのだと思ってくれたらしい。

「レベルは多少上がったみたいですけど、ソロのままだと危ないですからね。いつでも声をかけてくださいね、あ、500Gですけど」

と言われた。

うん、ありがとうございます。ただし俺のレベルは一切上がってないんですけどね。

そして、500G払ってもさすがに魔王退治にまで付き合ってはくれないだろうしなあ。

良心的な値段だが、俺はいつか魔王を退治する勇者なのだ。

同じ志を持った仲間が見つかるまで頑張るのみ！

寝る。

【十六回目の日記】

妖刀カマイタチをゲットしたぞおおおお！！

地のダンジョンにてただならぬ雰囲気を漂わせた宝箱を発見し、慎重に開けてみるとそこには噂に聞く妖刀が！

かつては仲間もいない一人旅時代だった（レベルは普通に上がっていた）時に使っていた呪われた装備に雰囲気似ていたが、使ってみると多少うひひと口調がかわりかけたが、問題なく使えた。

早速オークなどに試し切りしてみるとなんと四回斬りつけていたのが三回に短縮さ

れた、すげえ！

だがおかしいな。

確か俺の聞いた噂だと妖刀カマイタチを振るえば一撃で三方向を斬れるとか、三体倒せるとか、通路の入り口からモンスターと戦うのに便利だと旅の最中に知り合った風来人から聞いていたのだが、これは単一にしか刃が飛ばないようだ。

話が嘘だったのか、それとも本物とは違うのか、謎である。まあ切れ味のいい剣とはこれでおさらばだ、今後はこれを使っていこうと思う。

そして、なんとかそれのおかげで地のダンジョンの最奥にまで侵入し、守護神と遭遇した。

地のダンジョンの守護神はキメラ、酷く口が悪いケダモノだった。

森の守護神同様相手のステータスを見切る力があるのか、俺がレベル1だと知ると激しくこきおろされた。

なにか「レベル2ぐらいにまではあげてこい」だ、「調子こいてんじゃねーぞ、おいこら」だ。

「どこの世界にレベル1の雑魚が魔王倒すことなんてあるんだよ」

ぶげらと爆笑されて、ついマジ切れして殴りかかったが返り討ちにあつた。

あの野郎、ひたすら頭と口調はチンピラの癖に爪は毒持つてるわ、ひたすら魔法連打

してきたとんだクソ野郎だ。

ちくしょう、俺だってレベルが上がるものなら上げてるわ。

レベル1でも魔王倒せること証明してぶっ倒してやる!!

まだ身体がだるいので解毒薬を寝酒代わりに飲んで寝る。

【十七回目の日記】

ベビモスさんにやられました！

うん、どんだけ強くなってるのかなって思ってたかまいたち片手に森のダンジョンにまたいったらぶっ飛ばされた。

所詮レベル1だったんな、おれ。油断しすぎだろ。

「何をやってるのだお前は、これ以上弱くなってどうする」

といわれても言い返せませんでした、まる。

集中力が切れておる、焦りは禁物だということがよくわかったぜ。

【十八回目の日記】

心頭滅却、己の弱さを自覚せよ。

朝から街の片隅で座禅を組み、女神象のある泉で桶から水を頭に被って瞑想修行を行なった。

心だ、まずは心で斬るのだ。

相手の強さよりも己の弱さを克服すべし、ラルフよ、まずは心のレベルを999にするのだ。

という気分で昼まで水を浴びていたら、妙に巨乳で露出度の高いマツシブな少女が後ろで五十回ほど通りかかるのを目撃した。

鍛えるっすーという高らかな声と共にランニングをして体を鍛えているスポーツマンというよりも格闘家か？

だがそこで俺は一つの真理を掴んだ。

あんなに鍛えていても胸は揺れる。

揺れるのだ。

どれだけレベルを上げてても女の胸は揺れるのだ。

一つの真理を悟った俺の心は不動だった。

地のダンジョンにもぐり、まさしくマツシブといったバーサーカーと遭遇しても俺は不動だった。

三十度を超える剣と拳の交差を行い、殴られながらも回復魔法で傷を治し、出足を打って僅かに稼いだ時間でポーションを飲み干す行動にも俺の心は震えることはなかった。

幾ら筋肉だろうが、咆哮で奮い立たせようが、俺の心に動揺はない。

揺れない胸に畏れるものなどはないのだ。

バーサーカーを撃破し、そのままキメラへと再戦した。

俺は不動の心のまま戦った。

ストーンを撃たれても不動の心で反射した。

クエイクを撃たれても不動の心で魔法を反射した。

毒爪で斬られても、不動の心で魔法の反射に失敗した。

幾ら毒爪で殴られようが、ひたすら反射の態勢でまるで怯まない俺に何故かびびったのか、魔法を撃たなくなったキメラ。

どうやらMPが尽きたようなので不動の心で刀を抜き、斬りかかり、死等の果てに惜しくも敗れた。

「なんか怖いんだけどお前!! もうくるな!!」

といわれたが、お前を倒さないと次に進めないからしょうがないだろう。

とはいえどうやら今の俺は力不足のようだ。

多少戦えるようになったし、森のダンジョンの賞金首でも倒して腕を磨こう。

俺の心は不動だった。